

《注意》字数制限のある問題では、句読点や記号も一字として数えることとします。

「一」次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ①事態が紛糾する。 ②穏便に事を進める。
 ④あの一派が過半数を占めた。 ⑤謹んでおわびする。
 ⑦授賞式への出席をシタイする。 ⑧政府のまとめたシシンに従う。
 ⑩あてが外れてラクタンする。 ⑪仕事をイツカツして引き受ける。
 ⑬作業がトドコオる。 ⑭山の頂上をアオギ見る。 ⑮知識をタクワえる。

「二」次の問題文を読んで後の問いに答えなさい。

先にお話ししたように、憲法は「個人の尊重」という価値を大切にします。多様な意見を受け入れて、それぞれが自立して生きていける社会が自由でよい社会だと考えています。

そのためには他人の意見も尊重することが求められ、社会の中で自分の役割をしつかりと自覚してそれを果たすことも求められます。「自分勝手」とは無縁でなし、みずからの意思で家族や地域を大切にすることにもつながります。

かりに、権力者が自分に都合のいい人だけを尊重したり、多数派の人が自分たちと同じ考えを少数派の人に強制したのでは、多様性を受け入れてそれぞれの個性を生かす社会にはなりません。そこで、こうした②権力者や多数派にも、あらかじめ歯止めをかけておく必要があることがわかります。

《 I 》スポーツやゲームにはルールがあります。強い人でもルールを守るからこそ、みんなが楽しめるわけです。強い人が負けそうになったからといってゲームのルールを無視したり、勝手に変えたりすることを認めては話になりません。私たちの社会も、強い立場の人でも守らなければならないルールを A あらかじめ決めておくことで、人びとがより幸せになれるようにしました。それが憲法です。

では③憲法とふつうの法律はどう違うのでしょうか。

法律は私たちのわがままを少し制限することによって、社会の秩序を維持します。ある人の言い分だけを聞いていたのでは、別の人がおもしろくなくなります。そこでいろいろな意見を調整して法律をつくり、人びとの意見のぶつかり合いを正しく調整しているのです。

では法律はなぜ、「正しく調整している」と言えるのでしょうか。それは、「その時代のその地域の多くの人びとの意見に従っているので正しい」と考えているのです。昔は「国王や君主がつくった法律だから正しい」と説明したのですが、今は民主主義の時代です。すから、「国民の多くが正しいと考えるから正しいのだ」と説明することになります。

では、国民の多数が正しいと考えただけで本当に正しいのでしょうか。みなさんも歴史で勉強したように、そのときどきの多数派は過ちを犯す危険性があります。ナポレオンの帝政もドイツのナチスもそうでした。日本も国民の多数が熱狂的に戦争を B 支持した時代もありました。ふり返ってみると、国民の多数派が過ちを犯すことはよくあることなのです。不正確な情報に踊らされたり、ムードに流されたり、目先のことに心を奪われたりして、冷静な正しい判断ができなくなる危険性を誰もがもっています。

そこで、そうした人間の弱さに着目して、あらかじめ多数派に歯止めをかけることにしたわけです。多数決で決めるべきこともあるけれど、多数決で決めてはいけないこともある。それを前もって憲法の中に書き込んでおくことにしたのです。それが「人権」であり「平和」です。みなさんも、いくらクラスの多数決で決めたからといって、誰か一人に掃除当番を押しつけることが許されないのを知っているはずですよ。

国民の多数の意見に従って政治をすすめる「民主主義」に対して、それに歯止めをかけていく考え方を「立憲主義」といいます。「国民の多数意見に従った権力であっても、歯止めをかけなければならないときがある」という考え方です。

民主主義はとても大切です。しかしそれと同じくらい、立憲主義も大切なのです。人間は不完全な生き物で過ちを犯す危険性もっているからです。憲法は人間に対する謙虚さから生まれたものといってもいいでしょう。法律はそのときどきの必要性によって多数派によりつくりられ、社会の秩序を維持していきますが、憲法はもっと長い目でみて、この国に住む人びとの幸せにとって本当に大切なことを規定するものなのです。

④ところで、憲法は公務員に「憲法尊重・擁護義務」を課しています(九九条)。公務員は、国や地方自治体において権力を行使する人たちです。国民の人権を D 侵害してしまいがちな立場にいるために、とくに憲法を守らなければならないとされているのです。日本の憲法は国民には「憲法を守れ」と言っています。国民はむしろ「憲法を守らせる側」にいるからです。その意味では、権力者行使する側の人にとって、憲法はつねに「押しつけられた」と感じるものなのです。

法律が「国民の自由を制限するもの」であるのに対して、憲法は「国家権力の自由を制限するためのもの」と言えます。《 II 》憲法が「人権規定」中心で「国民の義務や責任に関する規定」が少ないのは当然なのです。もし憲法の中に国民の義務や責任を多く入れてしまうと、それは憲法ではなく、単なる法律になってしまいます。

憲法はそのときどきの一時的な多数意見に歯止めをかけて、国民の人権と平和を守ろうとした大切なものです。

問一 — 線部 A 「あらかじめ」、— 線部 B 「支持」、— 線部 C 「擁護」、— 線部 D 「侵害」の問題文中の意味として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- A** あらかじめ
ア、慎重に
ウ、厳格に
オ、前もって
イ、勇気をもって
エ、おおむね
- B** 支持
ア、ある行動をするように指図すること
ウ、思想・意見などに賛成して援助すること
オ、世間の風潮に流されまいと決意すること
イ、強く反対して意見を曲げないこと
エ、上の立場の人の指示に無批判に従うこと
- C** 擁護
ア、多少制限すること
ウ、改善を試みることに
オ、かばい守ること
イ、慎重に行使すること
エ、考え決断すること
- D** 侵害
ア、他人の権利などを損なうこと
ウ、自分の権利などを放棄すること
オ、自他ともに権利などを尊重すること
イ、他人の権利などを優先すること
エ、自分の権利などを主張すること

問二 — 線部①「個人の尊重」とありますが、「個人の尊重」の説明として適当でないものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、自分と異なるさまざまな意見も尊重するように求められること。
イ、それぞれが自立して生きていける社会をめざすこと。
ウ、為政者が自分の支持者の意見を強く政治に反映させること。
エ、何ごとも多数決によって決め、その決定に皆が従うこと。
オ、社会の中で自分の役割を自覚し、果たすよう求められること。

問三 — 線部②「権力者や多数派にも、あらかじめ歯止めをかけておく必要がある」とありますが、何が「歯止め」となるのか。問題文中から二字で抜き出して答えなさい。

問四 へ I へ II へ
ただし、同じ記号を二回使うことはできません。
ア、たとえば イ、なぜなら ウ、ですから エ、しかし オ、あるいは

問五 — 線部③「憲法とふつうの法律はどう違うのでしょうか」とありますが、

- (一)「法律」は、どのような目的で作られていますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア、皆のわがままを少しづつ制限すること、経済的に豊かな社会を実現する目的。
イ、さまざまな意見のぶつかり合いを正しく調整し、社会の秩序を維持する目的。
ウ、国王や君主が作ったルールを守らせることで、その権威を維持する目的。
エ、国民の多くが正しいと考えるルールを作り、政治への意識を高める目的。
オ、少数派の意見も十分に尊重し取り入れることで、自由な社会を実現する目的。

(二)「憲法」は、何を守る目的で作られていますか。問題文中に挙げられているものを二つ答えなさい。
また、それらはなぜ「ふつうの法律」ではなく「憲法」で守られなければならないのですか。

問六 — 線部④「ところで」という接続詞の問題文中での働きを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア、「公務員は憲法を積極的に守っている」という主張と、「公務員は憲法違反を犯しがちだ」という対立する主張をつなぐ働き。
イ、「国民は憲法を守る側にいる」という主張と、「国民は憲法を公務員に守らせる側にある」という対立する主張をつなぐ働き。
ウ、民主主義が多数派と少数派の融和を進めるといふ話題から、立憲主義が国民と公務員の対立を生むといふ話題に転換する働き。
エ、国民がどのような権利を保障されているかといふ話題から、どのような義務を負わされているかといふ話題に転換する働き。
オ、憲法はどのような理由で生まれたのかといふ話題から、特に憲法を守らなければならないのは誰かといふ話題に転換する働き。

問七

問題文の展開を説明したものと最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア、最初に、憲法が「個人の尊重」を重んじていることを述べている。次に、多数派の意見を重んじるのが「立憲主義」、少数派の意見を重んじるのが「民主主義」であると説明し、その考え方に基づくのがそれぞれ「憲法」・「法律」であると論じている。
- イ、最初に、憲法が「個人の尊重」を重んじていることを述べている。次に、個人が自立して生きるために、経済的利害関係を調整するのが「法律」、個人が自由に生きるために、人権や守るべき義務を定めたのが「憲法」であると論じている。
- ウ、最初に、憲法が「個人の尊重」を重んじていることを述べている。次に、憲法と法律を比較しながら、憲法が法律よりも優れている点を挙げている。そして、ゆくゆくは憲法の理念に合致した法律に変えていかなければならないと主張している。
- エ、最初に、憲法が「個人の尊重」を重んじていることを述べている。次に、個人が尊重される社会を実現するために多数派や権力者に歯止めが必要であると論じている。そして、どう歯止めをかけるか、「憲法」と「法律」と比較しながら説明している。
- オ、最初に、憲法が「個人の尊重」を重んじていることを述べている。次に、多数派の意見と同じように少数派の意見も尊重することの大切さを論じている。そして、少数派の意見を尊重するためには「憲法」と「法律」のどちらも必要であると主張している。

「三」「僕」は文化祭で出す喫茶店の準備をするため、深夜の学校にしのびこんだ。一人で飾りつけを終わらせ、クラスのヒーローになろうと考えたからである。その後、飾り付けを終わらせることができず、諦めて帰ろうとした時に、同じく学校にしのびこんでいた加地と出会った。以下に続く問題文を読んで後の問いに答えなさい。

「プラネタリウムを作ったんだ」

やけに人懐っこい笑みを浮かべながら、加地は立ち上がった。

①僕は加地がこんな顔をするなんて知らなかった。

「プラネタリウムって、あれか、星を映す奴か？」

「そうだよ」

「すごいな」

「観ていくか？」

「おお、いいな」

それで僕たちは揃って廊下を歩き出した。共通の友達のことや、女の子のことや、嫌な先生のことを話してうちに、物理生化学教室に着いていた。机の上にランタンみたいな照明装置が置いてあって、その明かりでぼんやりと半球状の物体が見えた。直径三メートルくらいのドームが、天井からぶら下がっていたのだ。ドームの縁には床まで届く暗幕がぐるりと巻きつけてあった。

「おい、本格的じゃないか」

僕は驚いてしまった。

ランタンみたいな照明を手にした加地は得意気に、

「まあ、入れよ」

と言って、ドームに姿を消した。

加地を追って中に入ると、僕はさらに驚かされた。なんと、そこには見事な人工の星空がすでに広がっていたのだ。想像していたよりもはるかにきれいだったので、I した。まるで本物の星空のようだ。すごい。これは本当にすごい。加地がなにかのスイッチを入れると、その見事な星空がゆっくりと回転し始めた。

僕の体の上を、無数の星が動いていった。

「おまえが作ったのか、これ」

「いちおう部活のみんなで作ってることになってるんだけどさ。実際はほとんど俺だけで作ってるよ。去年くらいからやってるんだ」

「去年？ そんな前からか？」

「ああ。でも、全然追いついてないんだ。本体はどうか動くようになったし、星空もけっこうきれいに再現できるようになったんだけど、この——」

と言って、小さな箱を叩いた。

「——流星発生装置がうまく動かなくてさ。だから今晚も来てたんだ。何度やっても、うまく動いてくれなくて参るよ」

「へえ」

今晚も、と加地は言った。ということは、今までも何回か来てたのだろう。よくもまあ、文化祭ごときにそこまでの情熱を注げるものだ。それにしても、僕たちの頭上に広がる星空は、本当に見事だった。いつまでもぼんやりと観ていたくなるくらいきれいだった。喫茶店の飾りつけさえもうまくできない僕とは大違いだ。

普段、どことなく暗い加地のことを、僕はどこかバカにしていた。僕だけではなくて、運動部系の人間は、文化部系の連中を、だいたいそんなふうに見ている。しかしこの瞬間、僕は②完全な敗北感を味わっていた。③加地がとんでもなく上等な人間に思った。なにしろ、僕はクラスメイトたちにいい格好をしたくて、今夜ここに来たのだ。ただ見栄のために、だ。それに対し、加地はもっと遠くを見ていた。この美しい星空のために、加地はここにいるのだ。

しばらくのあいだ、僕たちは星空を眺めながら、黙ったままでいた。僕の方は劣等感や嫉妬といった薄汚い気持ちでぐちゃぐちゃになっていたのだけれど、加地はそんな僕とは違って、やけに

Ⅱ

Ⅲ

した顔を星空に向けていた。

ああ、本当にきれいな星だ……。

それはまるで今の加地のようだった。不器用で、友達が少ない、本ばかり読んでいて、周囲から意気地なしだと思われていて、だけど誰よりも意気地を持っている。プラネタリウムが映し出す星々のように、加地は輝いていた。

やがて加地はしゃがみ込むと、

「なんで動かないのかな」

そう言っ、またあの箱みたいな装置を叩いた。

僕は加地のそばに行き、そいつを覗き込んだ。

（中略）

「その設計図、見せてみる」

加地がポケットから取り出した紙片は、もうくしゃくしゃになっていて、手垢までついていて、それで僕は、こいつがどれほど苦労してこの機械を作ったのか理解した。何度も何度も組み立て、そのたびに動かず、けれど諦めず、ずっと挑戦し続けてきたのだ。

「ああ、だいたいわかった」

僕はドライバーを使って、流星発生装置をバラバラにした。そしてスリットの部分を加地に押しつけた。

「これ、作り直せよ。幅はたぶん、この半分くらいでいいはずだ」

④ お、おう」

加地はびっくりして見えた。加地は

「悪いな、手伝ってもらって」

「まかせとけよ。こういうのは得意なんだ」

僕たちはそれぞれの作業を開始した。半田ゴテを使って、間違った変圧器を取り外し、正しいのにつけ直す。そのついでに、取りつけの甘かった回転部分を補強しておいた。こういうところをしっかりと作っておかないと、機械というのはすぐに壊れてしまうのだ。加地の方は薄いプラスチック板をカッターでくりぬいていた。

「川嶋、すごいな」

作業を続けながら、加地が言った。

「よくそんなのわかるな」

「うちの親父が、電気製品いじるのが好きなんだよ。掃除機とか、ラジオとか、買ってくると必ず自分で一回ばらして組み立て直すんだ。そういうのを小さいころから見てたからな。」

⑤ 門前の小僧って奴だよ」

「いや、すごいよ。本当にすごいって」

加地がバカみたいに褒めるものだから、やけに照れ臭かった。

「科学部なんかにしても、俺は文系だから、機械のことは全然わからないんだ」

「俺もなんとなくわかるだけだよ。それに俺、ガサツだから、あんまり細かいことまではできないし。おまえこそ、よくそんなにきれいにくりぬけるな」

こんな簡単な機械も組み立てられないくせに、加地は恐ろしく手先が器用だった。カッターを使って、滑らかな曲線をきれいにくりぬいている。完全なフリーハンドだ。僕だとあんふうにきれいに切るのは無理だった。ぐちゃぐちゃになってしまう。

「加地は美術の成績よかったものな。センスあるんだな、そういう」

僕が褒めると、加地は恥ずかしそうに笑った。そのシャイな感じが、不思議とカッコよかった。なるほどな、と僕は思った。弱っちいくせに、加地はけっこう女の子にモテる。いや、モテるとい言葉は、少し違うか。隠れファンみたいな子が何人かいるという感じだ。

三十分くらいで流星発生装置とやらは完成した。僕にすれば簡単なものだった。スイッチを入れると、いきなり流れ星が映し出された。ひゅんひゅんとおもしろいように流れる。加地も僕も X の声を上げた。作った僕たち自身でさえびっくりするくらい、その流れ星はきれいだった。

（中略）

「ありがとう、川嶋。助かったよ」

ガキみたいな顔で、加地が礼を口にした。

ああ、こいつはこんなに素直だったんだな。加地の新たな一面を知ったような気分だった。文化部系にありがちな、もつと拗ねた奴かと思ってたのに、本当はガキみたいな顔ができるんじゃないか。

気がつく、僕は加地に頼み事をしていた。

「あのさ、加地、手伝ってくれよ」

「手伝う？ なにを？」

「俺の教室の飾りつけ。全然うまくできなくて、不貞腐れて帰ろうと思ってたんだ。みんなにいい格好しようと思ったのに、大失敗だよ」

⑥ギブ・アンド・テイクって奴だな、と加地が言った。
 おお、と僕は肯いた。

それから僕たちは、揃って僕の教室に移動した。僕が投げ出したリボンや布やらが、汚らしく床に放り出してあった。ああ、僕はなんていい加減な奴なのだろう。始める前より、ひどくなってるじゃないか。まともに片付けもせず、帰ろうとしていたのだ。本当に最低だった。

明るい色の布を手に取り、加地は言った。

「じゃあ、始めるか」

あいつのセンスは、たいしたものだった。

なんでもない布を垂らし、リボンを下げ、色紙を切ったり貼ったりしているだけなのに、どんどん見事な飾りつけができていった。赤い紙や緑の紙を組み合わせると、むちゃくちゃおもしろく感じられる模様が現れた。なんでこんなことができるのだろうか。⑦それはまるで魔法みいだった。

飾りつけが終わるまで、たぶん一時間もかからなかっただろう。

(中略)

「なんでこんな作れるんだ?」

僕が Y を込めてそう言うと、椅子の上に立ったままの加地が得意気に笑った。もちろん僕だって笑った。夜の教室に、僕たちの笑い声が響いた。不思議なくらい、加地のことが近しく感じられた。そして、加地が同じように僕のことを近しく感じてくれることもわかった。それはなんだか、ひどく気持ちのいいことだった。⑧サッカーで逆転ゴールを決めるのと同じくらい楽しかった。

(橋本紡『流れ星が消えないうちに』より。)

問一 線部①「僕は加地がこんな顔をするなんて知らなかった」とありますが、「僕」の加地に対する普段の印象として適当で

ないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、意気地のない奴

イ、どことなく暗い奴

ウ、弱々しい奴

エ、拗ねた奴

オ、センスがある奴

問二 へ I へ II へ に入れるのに最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、すつきり

イ、ぐったり

ウ、びっくり

エ、いらいら

オ、めそめそ

問三 線部②「完全な敗北感」とありますが、この時の「僕」の気持ちを問題文中から二十字以内で抜き出し、最初と最後の四字を答えなさい。

問四 線部③「加地がとんでもなく上等な人間に思えた」とありますが、「僕」が加地を「上等な人間」だと思ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア、クラスのために嫌々取り組んでいた自分と違って、加地はプラネタリウムを完成させたい一心で努力を続けていたから。

イ、いい格好をするためにここに居る自分と違って、加地には自分にしかできないことを果たそうとする責任感があったから。

ウ、見栄のために行動していた自分と違って、加地は純粹に美しいものを作ろうという気持ちで行動を起こしていたから。

エ、短時間でクラスの信頼を取り戻そうとしている自分と違って、加地は長い時間をかけて何度も挑戦してきたから。

オ、自分は加地のことを少しバカにしていたが、加地はそんなことを気にもせず自分に対等に接してくれたから。

問五 線部④「お、おう」とありますが、この時の加地の気持ちとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア、「僕」がどんなに前向きでも、簡単に問題が解決する訳ではないという諦めの気持ち。

イ、何気ない話題だったのに、必要以上に口を出そうとする「僕」に対しいら立つ気持ち。

ウ、普段から高圧的な態度の「僕」に、何か要求されるのではないかという不安な気持ち。

エ、スポーツばかりで勉強をしない「僕」に、本当に装置を直せるのかと心配する気持ち。

オ、「僕」が流星発生装置の仕組みを理解し、すぐに直そうとすることへの驚きの気持ち。

問六 線部⑤「門前の小僧って奴だよ」とありますが、これは「門前の小僧習わぬ経を読む」ということわざを表しています。

その意味として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア、辛抱強くずっと耐え忍んで待っていれば、いつか望みが叶うということ。

イ、繰り返し見聞きできる環境にいれば、自然とその知識がつくということ。

ウ、罰を受けることによって、同じ過ちを繰り返さずに成功するということ。

エ、同じことを繰り返し行うことで、身分に関係なく成長できるということ。

オ、幼少時に教わったことは、どれだけ時間がたっても忘れないということ。

問七 **X**・**Y**には同じ言葉が入ります。その言葉として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
 ア、畏怖 イ、悲願 ウ、尊敬 エ、感嘆 オ、羨望

問八——線部⑥「ギブ・アンド・テイク」とは、ここではどのようなことを指していますか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。
 ア、今夜、文化祭の飾り付けを完成させることができれば、「僕」はクラスのみんなの称賛を浴びるが、完成させられなければ、非難を浴びること。
 イ、流星発生装置の組み立てに成功すれば、加地は科学部のみんなに褒められるが、組み立てに失敗すれば、加地はみんなに責められること。
 ウ、流星発生装置に苦戦している加地を電気製品の組み立てに詳しい「僕」が手伝い、文化祭の飾り付けを投げ出してしまった。「僕」を美術の得意な加地が手伝うこと。
 エ、クラス全員で完成させるはずだった文化祭の飾り付けを「僕」一人で行い、科学部のみんなでやることになっていた流星発生装置を加地一人で完成させること。
 オ、教室の飾り付けが苦手な「僕」を加地が手伝う代わりに、運動部系の人間から少しばかりにされている加地をこれからは「僕」が味方すること。

問九——線部⑦「それ」とはどのようなことを指していますか。二十五字以内で答えなさい。
問十——線部⑧「サッカーで逆転ゴールを決めるのと同じくらい楽しかった」とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明しなさい。

〔 四 〕 次の問いに答えなさい。

問一 次の——線部の品詞として適当なものを後のア～コから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。
 1 兄の作った料理はおいしかった。
 2 とてもうれしいことがあったので、頬が緩んだ。
 3 師匠が弟子の力量を試した。
 4 ご紹介をいただき、ありがとうございます。
 5 今年こそは、物事を計画的に進めていこうと誓う。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|------|
| ア、名詞 | イ、動詞 | ウ、形容詞 | エ、形容動詞 | オ、副詞 |
| カ、連体詞 | キ、接続詞 | ク、感動詞 | ケ、助動詞 | コ、助詞 |

問二 次の1～3は慣用句を含む文です。□に入れるのに適当な漢字一字を答えなさい。
 1 姉は□を割ったような性格で、悩みがなさそうだ。
 2 何を言っても揚げ□をとられてうんざりする。
 3 中学校の三年間は、光陰□のごとく、あっという間に過ぎ去った。

問三 次の文中で正しい漢字の使い方をしてるのはア～ウのどれですか。それぞれ記号で答えなさい。
 1 (ア、核心 イ、確信 ウ、革新) を突く、鋭い質問をされた。
 2 中学生を(ア、対称 イ、対照 ウ、対象)とした大会に参加する。

国 語 解 答 用 紙

得 点

受 験 番 号

内には何も書かないこと。

〔一〕				
⑬	⑩	⑦	④	①
る			めた	
⑭	⑪	⑧	⑤	②
き			んで	
⑮	⑫	⑨	⑥	③
える	う			

〔二〕				
問六	問五		問二	問一
	(二)	(一)		A
問七	なぜ「ふつうの法律」ではなく「憲法」で守られなければならないのか。 「憲法」は何を守る目的で作られているか。			B
				C
			問三	
			問四	D
			I	
			II	

〔三〕			
問十	問九	問五	問一
		問六	問二
			I
		問七	II
		問八	問三
			3
			問四

〔四〕	
問二	問一
1	1
2	2
3	3
問三	4
1	
	5
2	

国語 解答用紙

得点

受験番号

内には何も書かないこと。

〔一〕				
⑬	⑩	⑦	④	①
滞る	落胆	辞退	しめた	ふんきゅう
⑭	⑪	⑧	⑤	②
仰ぎ	一括	指針	つつしんで	おんびん
⑮	⑫	⑨	⑥	③
蓄える	償う	陳謝	放免	こぶ

〔二〕				
問六	問五		問二	問一
オ	(二)		ウ 順不同	A
問七	法律は多数派の意見に従って作られるが、多数派が過ちを犯すことはよくあるの で、多数決で決めてはならないことを憲法に定めて守るため。		エ	B
エ			問三 憲法	ウ
	(一)		問四 I	C
	「憲法」は何を守る目的で作られているか。 「国民の」人権		ア	D
	平和 順不同		II	ア
	なぜ「ふつうの法律」ではなく「憲法」で守られなければならないのか。		ウ	

〔三〕				
問十	問九	問五	問一	
心のどこかでバカにしていたが、意外な特技を活かして助け合ったのがきっかけで、互いに自分に嫌気がさしていたが、意外な特技を活かして助け合ったのがきっかけで、互いに近しく感じていく。	こと。	オ	オ	
	[Blank]	平凡な素材	問六 イ	問二 I
		から見事な飾りつけができていく	問七 エ	ウ
			問八 ウ	II
			問三 劣等感	A
				問三 イ
				問四 ウ

〔四〕	
問二	問一
1 竹	1 ウ
2 足	2 オ
3 矢	3 イ
問三 1 ア	4 ア
2 ウ	5 コ